

【7】考察と今後の課題

(1) 考察

《研究の取り組み》

この研究が始まった時、「生活を楽しむ」ことは生活単元学習を中心としたこれまでの小学部の取り組みそのものであり、その上に何を積みあげていったらよいのか正直言って戸惑いがあった。

しかし、1年目の実態調査から、予想以上に小学部の児童の楽しみ方には偏りがあることや、狭い範囲でしか楽しめていないことが明らかになった。そこで、「その子なりの楽しみをもっと増やしたり、広げたりしていこう」「子どもたちが自分たちの力で楽しめるよう、子どもたちの自己活動・自己選択の場面を増やしていこう」等の目標ができ上がっていった。これは、児童の実態をぼんやりとしかとらえていないことがまだまだあるという反省となった。

2年目は、題材の選定と支援の工夫に焦点をあてた「授業づくり」に取り組んだ。研究授業では、その都度新たな問題が提起された。例えば、支援の在り方では、初めはできる状況づくりに着目していたのが、それだけではなく最近接領域からの課題提示や自分の力で乗り越えられる可能性のある課題も必要であることが話し合わせ、次の実践に活かしていった。また、自己活動・自己選択のできる子を育てるための支援の方法などについても討議を重ねた。

3年目の今年度は、教師自身が生活単元学習をもう一度学習し直すことにより、単元の見直しを含め、研究の取り組み全体を発展させることができた。これは、多様化していく児童たちの実態から見ても、時期を得た取り組みであった。また、適切な支援を進めるためにVTRを使った授業のミクロな視点の分析にも取り組んだ。これは、教師自身の対応を振り返るためにとってもよい方法だった。ただ、時間や人手の足りなさなどから回数が少なかったのがこれからも一層取り組みを深めていけるような工夫をしていきたい。

《児童の変容と、教師の変容》

C男は、12月のなかよしパーティーの始めの会の後、休憩時間にクラスの友だちを集めて、「さあ、パーティーをしよう。S子ちゃんは司会をして、U男ちゃんは手品の用意をして」と昨年までの生活単元学習を思い出して遊びだした。これまでも一人遊びや教師との関わりの中では見られた姿だが、児童だけの力で友だちと一緒にやろうとする姿は見られなかった。楽しい活動への見通しがあると子どもたちの活動が広がった例である。

また、附養文化祭で取り組んだ劇活動での変身ごっこは当日が終わっても続き、今度は自分が友だちのやった役になって遊んでいた。あまり人のやることには関心を持たないと思われていた児童も、友だちの役を見て自分の楽しみの中に取り入れていった例である。

このような児童の変容もあるが、最も変わったのは教師の対応である。これまでも「楽しさ」は常に頭の中にあっただが、それは何かを達成するための手段であって「楽しい」ことを目的とする意識は余り持っていなかった。今回の研究を通して教師自身が「楽しさ」を目的として、いろいろな支援をしていこうという発想の転換が行われた。

何かができるようになることが研究のねらいになると教師も児童もそのことに汲々としてしまいがちだが、今回の研究では、そういうことはなく、児童と一緒に楽しもうという姿勢ができてきた。また、教師自身が、よき支援者になろうという発想から児童の気持ちをくみ取り、自分自身の接し方を反省する機会になった。

(2) 今後の課題

「生活を楽しむ子をめざして」という研究テーマは、今年度で一応終わるが、教育の目標としてのテーマは残っていく。以下に今回の研究の残した課題を明らかにし、さらによりよい教育をめざした実践に取り組んでいきたい。

○児童の「楽しみ方」は理解できたか。

教師の観察によって「楽しみ方の実態」を知るだけでなく、遠城寺式乳幼児発達診断検査と新版K式発達検査、本校で作成した自分づくりの段階表等を照らし合わせて見ることによって、その児童の「今の楽しみ方」がどういう発達段階によっているかを明らかにし、次への課題を探ろうとした。さらに、「生活を楽しむ」支援は、必ずしも「できる状況づくり」だけではなく、発達段階から見た最近接領域からの課題提示ができればならないと考え、実践してきた。ただ、「楽しみ方」は発達段階だけでなく個々の障害や個性に左右される点もあり、より一層、個別の児童理解が求められる。

○児童は以前より「生活を楽しむ」ようになったか、「楽しみ」は広がったか。

児童が楽しんでいる姿は、実践の報告に示されたようにたくさん見られた。それは、教師が授業のPLANやDOの段階で、「楽しさ」を意図して実践した結果でもあり、また、SEE（評価）でも「楽しさ」を基準として意識した結果、たくさんの「楽しんでいる姿」が目についたことにもある。ただ、小学部の児童に「楽しかったか」とアンケートを求めたり言葉や文章から心の中を探ったりして評価するわけにはいかない。あくまでも教師の観察や家庭からの保護者からの報告でしか確認できない点は考慮する必要がある。

そして、一方、児童によって「楽しめていない」姿も残っている。例えば、集団参加のできにくい子、集団のルールが身につかない子は、やはり、楽しみ方の種類や内容が乏しくなってしまうがちな点である。「生活を楽しむ」ことと「生活を楽しむための力」とは卵と鶏の関係のように常に結びついている。「楽しみ」ながら「楽しむための力」を育てていくためにはどのようにすればよいのか、さらに実践を積んでいく必要がある。

また、学校で身につけた「楽しみ」をいかに広げていくか、逆に家庭や地域での楽しみをいかに学校の中へ持ち込むかの検討も残っている。学校週5日制の完全実施間近にひかえ、家庭や地域での生活時間をどうするのか、大きな課題となっている。

○今の「生活を楽しむ」ことがどう将来と結びつくのか。

小学部の今の姿が、どう、将来の姿と結びつくのか、この点の見通しを示せないと、小学部だけの実践に終わる。中学部ではここまで、高等部にいったらこれくらいまでという大まかな見通しを持って指導することが大切である。児童一人ひとりによって内容は異なり、教師によっても見方は変わるので、個人についての情報がもっと伝わるよう学部内の共通理解と共に各学部間の連携をさらに進めていきたいものである。

(細川彰夫)